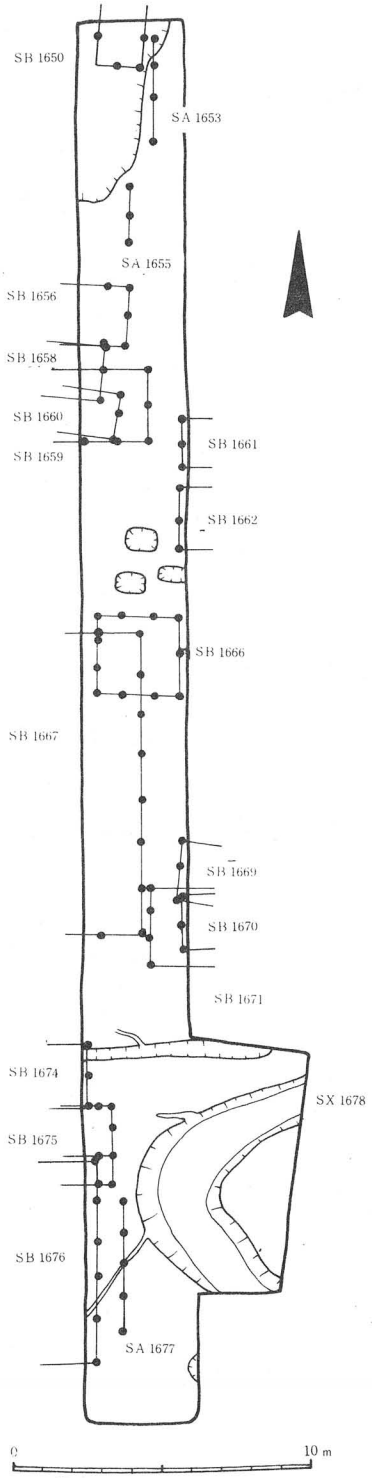
Ⅳ 平 城 京 の 調 査

① 左京三条二坊七坪の調査（第 103 － 1 次）

今回の発掘は奈良市北新町109の1、111の2、112の1、にまたがる明新社用地内の駐車場建設に伴う事前調査である。発掘区は左京三条二坊七坪にあたり、その南には三条条間路をはさんで一昨年発掘した庭園遺構（特別史跡・平城京左京三条二坊宮跡庭園）がある。調査は七坪のほぼ中央に南北トレンチ（91 × 8 m）を設定し、1977年5月9日から同年6月2日まで実施した。発掘面積は約 900 ㎡である。

遺 構

調査の結果、建物15棟、塀 3 条、土壙 4 、溝2条、旧河川を検出した。トレンチ調査のため、建物配置は明確でないが東西棟12棟、南北棟 3 棟である。うち一部規模の判明するものは、桁行五間と桁行七間の南北棟（SB1667・SB1676）、三間×三間の東西棟SB1666 のみである。前者の SB1667・SB1676 の南北棟建物をのぞいて、他は柱掘形が小さく（50～30㎝四方）、柱間もいずれも10尺にみたない小規模な建物群とみられる。径10㎝ほどの柱痕の残るものもある。建物には重複関係や方位の異るものがあり、 2 時期以上の変遷が考えられる。トレンチの南で検出した旧河川 SX1678は菰川の流路とみられるもので、北東から南東に大きく蛇行する部分を検出した。堆積土中から 8 世紀前半期の土器や、多くの木片や削り屑とともに「八田須支九口受〔道カ〕□

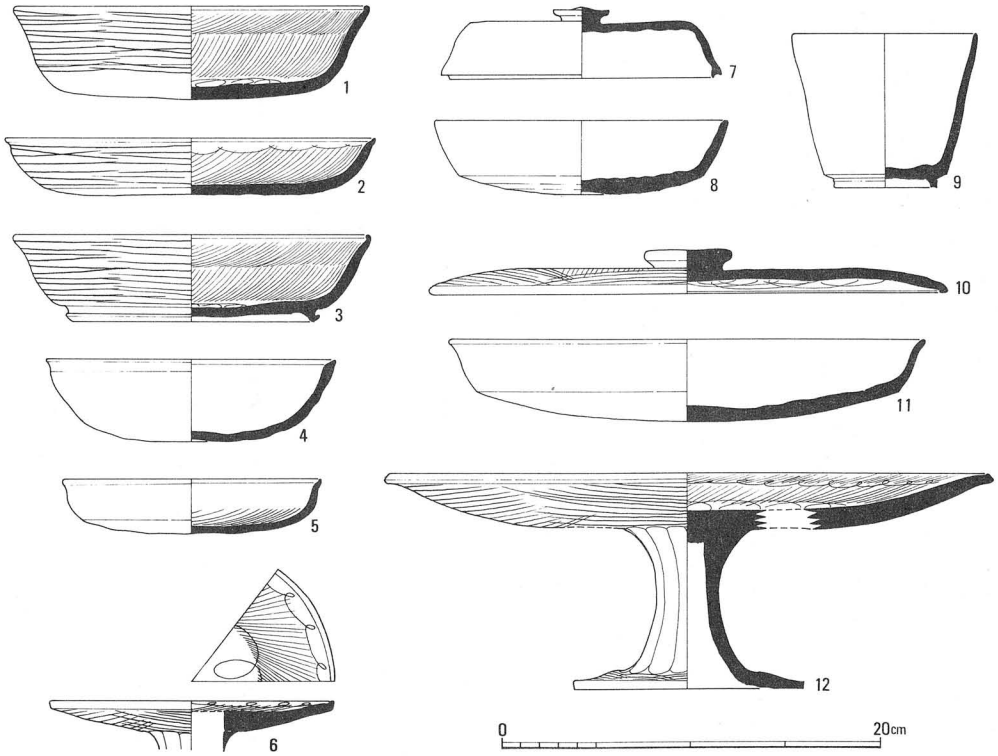


第 7 図　第 103－1 次調査遺構図

守石村」と記した木簡１点が出土した。なお、奈良時代の河床バラス層から弥生時代や古墳時代の土器が出土し、さらに一時期古い河川が存在する。この河川が埋められ整地されるのは、埋土から出土した土器によって８世紀の中頃とみられる。この河川は六坪の園池の導水路と関連すると思われる。

遺　物

遺物は全体に少ない。土器類は旧河川出土の８世紀前半の土器と遺構面をおおう包含層から出土した８世紀末から平安時代初頭にかけての土器が主なものである。なお、包含層出土の土器によって平安時代初頭に遺構が廃絶されることが判明した。瓦類は平城宮出土と同笵のものが多く、藤原宮式も若干混る。こうした出土傾向は六坪の庭園と共通している。他に前述の木簡１点が出土した。



第８図　第103－１次調査出土土器（１～６・10・12土師器、７～９・11須恵器）

② **左京四条三坊一坪の調査**（第 105 次）

調査地は佐保川の西岸、三条通りの南に接する奈良市塵芥処理場の跡地で、平城京の復原条坊地割では左京四条三坊一坪にあたる。奈良市の依頼をうけて当研究所が調査を担当した。発掘面績は約 550 ㎡である。

調査地には、すでに奈良市による造成工事が行なわれており、旧水田面上には塵芥を主体とする厚さ約 2 m の盛土があった。盛土以下は上層から順に耕土・床土（0.4 m）、黄灰色細砂層（0.5 m）、青灰色粘土層（0.8 ～ 1.0 m）が堆積し、さらにこの堆積の下層に、奈良時代から中世までの遺物を含む、厚さ約 0.2 m の暗灰色砂質土がひろがる。遺構は、主としてこの遺物包含層を取り除いてあらわれる茶褐色砂質土上面で検出した。茶褐色砂質土は奈良時代の整地土である。また一部の遺構は、この整地土の下層、暗灰色砂あるいは黄灰色砂の地山面上で検出した。

遺　構

発掘区の位置は、一坪の西南部にあたる。検出したおもな遺構には、掘立柱建物 5 棟、塀 1 条、素掘りの溝 3 条があり、ほかに性格不明の小土壙や小柱穴がある。また発掘区西辺で検出した南北方向の大溝 SD11は、出土遺物、土層の堆積状況からみて、中世の河床であった可能性が強く、中世以降の水田耕作に関連するらしい東西方向の溝も全域にわたって検出している。

なお東二坊大路の東側溝を検出するべくトレンチを設けたが、この範囲で明確な遺構を検出できなかった。

建物は SB 08 を除いてすべて奈良時代に属すと考えられるが、どの建物も発掘区の縁辺近くで検出されたため、全体の規模を明らかにし得ない。棟方向の判明したものに、東西棟 2 棟 SB 03、SB 08、南北棟 1 棟 SB 07 があり、このうち SB 03 は南廂をもつ建物である。

溝には東西方向の溝 SD 06、南北方向の溝 SD 04、建物にそって屈曲する溝 1 条 SD 09 がある。

これらの遺構には重複関係があり、建設の時期を大きく二つに分けることがで

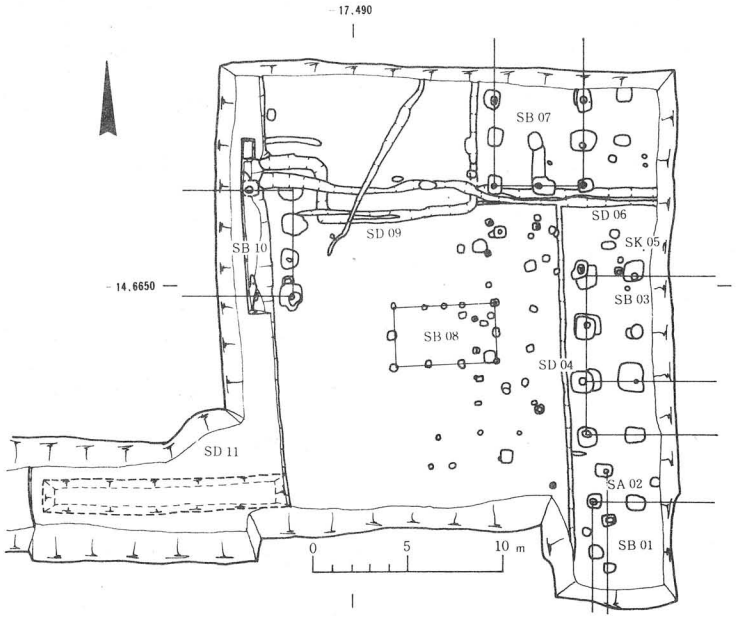
きる。すなわち最初は建物2棟SB07・SB10、これにそう雨落溝SD09、および塀SA02がつくられる。次の時期にはSA02は取毀され、SB01とSB03が南北に柱筋をそろえて建てられる。両建物の西側にそってSD04、北側にSD06が掘られる。このときにSB10は廃絶するが、SD06がSB07の南妻をよけるようにして掘られているので、SB07はこの時期にも存続する可能性がある。

遺　物

遺物の多くは遺物包含層から出土した。奈良時代のものでは土師器、須恵器が多く、瓦片は少ない。軒瓦は皆無であった。ほかに「和同開珎」銅銭1枚が出土している。特殊な遺物としてはSB07西南隅柱穴の柱痕跡から出土した径1㎝ほどの水晶玉がある。また、中世の遺物であるが、羽釜や、SD11から出土した柿経、板塔婆、漆椀などの木製品がある。漆椀の底には、「宝旛寺」の銘が記されていた。「宝旛寺」の由緒については不明である。

まとめ

限られた発掘区でもあり、また遺跡地周辺は、佐保川の氾濫などによるものか、地上における条坊痕跡の遺存が悪く、宅地割や各遺構の条坊内における位置づけなど、多くの課題を残した。しかし今回の調査により、平城京時代の遺構の存在が確かめられた意義は大きく、今後の調査のいかんによっては、上記の問題について検討できる可能性が大きくひらかれたといえよう。



第9図　第105次調査遺構図

③　左京三条二坊六坪の調査

第109次調査区は、昭和50年の第96次発掘区の北西に接続し、六坪の中心にある園池の北側を走る東西塀から三条条間路（現大宮通り）までの区域である。

遺　構

調査区はもと水田で、奈良時代遺構面までは約20～30㎝と浅い。遺構面は北半では黄灰色砂質土であるが、南半では茶褐色粘土で、その下は黄色粘質土、さらに黒色粘土層となり、かつて低湿地であったことがうかがえる。検出した柱穴の深さからみると、奈良時代地表面は現在より50㎝ほど高かったと推定される。

検出遺構は掘立柱建物５棟、溝２条、井戸２基、土壙などである。これらの遺構は、前回の調査結果と合わせて３期に区分できる。

Ａ－１期　掘立柱建物４棟、井戸２基がある。

建物ＳＢ1570は調査区中央にある身舎桁行５間、梁行２間で南廂をもつ東西棟である。柱間寸法は９尺等間。身舎南側柱列西第３柱穴には径32㎝で、面取りのある柱根が残存していた。身舎の柱掘形が１辺１～1.3ｍであるのに比して、廂の柱掘形は0.8～１ｍと小さい。廂東第２柱穴には柱根と礎板が残っていた。柱穴検出面と礎板との高低差は26㎝と極めて浅い。

建物ＳＢ1571はＳＢ1570の西６ｍに柱通りを揃えて並ぶ。東側柱列のみを検出した。ＳＢ1570と同規模の東西棟と考えられる。

建物ＳＢ1573はＳＢ1570の東南にある南北棟で、西側柱列をＳＢ1570の東側柱列とほぼ揃える。桁行５間，梁行２間で、柱間寸法は桁行８尺５寸、梁行７尺である。柱掘形は一辺0.5ｍと小さい。北西隅柱穴には柱根が残る。

建物ＳＢ1552－Ａは、ＳＢ1570の北東にある東西棟で、前回調査に続き新たに２間分検出した。南側柱列をＳＢ1570の北側柱列と、西側柱列をＳＢ1573の東側柱列と揃える。桁行６間以上、梁行２間で、柱間寸法は10尺等間である。

溝ＳＤ1545は前回調査に続き、調査区北端で検出した素掘の東西溝である。六坪と三条条間路とを画する築地の南側雨落溝と考えられる。

井戸ＳＥ1610は掘形が径約1.5ｍの不整円形で、深さは0.6ｍ、底面近くに方形の

側板痕跡を残す。

井戸SE 1611はSE1610の北西にあり、径約2 mの不整円形で素掘りである。深さは0.5 m。埋土からⅢ期の土器類が出土している。

A－2期　SB1573が廃絶し、SB1552を建て替える。

建物SB1552－Bは西から4間目で間仕切り、内部に棚状の施設をもつ。内部の柱穴は径約0.5 mで、側柱から3尺離れて、南北3間、東西2間並び、北側1間分はさらに東へ5間分のびる。

B期　これまでの建物・井戸を廃絶し、SB1574を作る。

建物SB1574は桁行5間以上、梁行2間で柱間寸法10尺等間の東西棟である。前回調査の礎石建物SB1540と柱通りを揃える。南側柱列東第5柱抜取穴からは平城宮出土瓦編年でⅣ期（天平宝字元年～神護景雲年間）の軒丸瓦が出土しておりB期の年代を推定することができる。

遺　物

出土した遺物には、瓦類、土器類、石製品がある。

瓦類には、多量の丸瓦、平瓦の他、軒瓦24点（軒丸瓦12点・軒平瓦12点），面戸瓦1点がある。軒瓦は藤原宮式を含めⅠ～Ⅳ期までみられ、平城宮出土瓦と同笵のものである。量的には軒丸瓦6285型式、軒平瓦6667型式を中心とするⅡ期（養老5～天平17）のものが多い。

土器類には、土師器皿・高杯・甕、須恵器皿・杯・高杯・盤・火舎・鉢・擂鉢壺などがある。SD1545からは奈良時代前半期のものが多く、土馬の尾部も出土している。

石製品は、SD1545から出土した。将棋駒形をなし、頂部に径0.6 cmの円孔がある。中央部幅14.7 cm、長さ19.6 cm、重さ2296 gである。

まとめ

前回調査と合わせて、六坪の約35％が調査された。未発掘部分が多いため、六坪の全体的な構成・性格については十分に把握しがたいが、今回までの調査で明らかになった坪内の利用状況は次のようである。

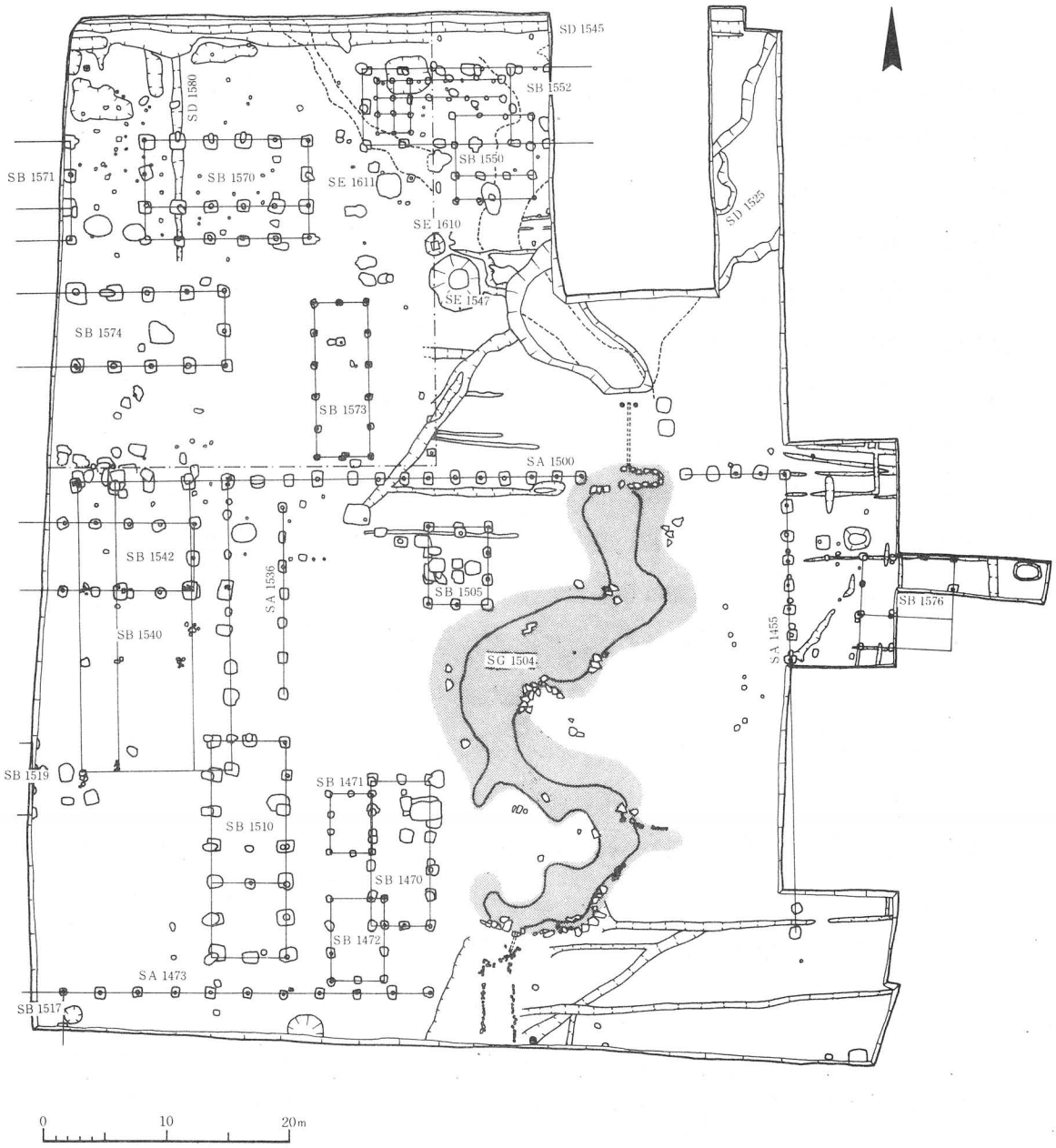
A－1期　坪の中心に園池SG 1504が作られ、これらを囲む塀SA 1500、SA 1473、SA 1483により、坪は南北に140尺で三等分される。今これを南区・中区・北区と呼ぶと、建物は、中区ではSB 1510、SB 1542、北区ではSB 1570、SB 1571、SB 1573、SB 1552－Aがある。建物・塀の配置は、坪中心からの距離が10尺単位の数値で割り付けられる。この時期はSG 1504への導水路SD 1525出土の「和銅五年」「和銅七年」の木簡により、平城京造営当初におかれる。

A－2期　東西塀SA 1500が東に柱間7尺で延長され、中区と北区とが明確に区画される。中区ではSB 1505、SB 1470が坪中心より7尺で割れる位置に新築され、北区ではSB 1552が建て替えられて、内部に棚状の施設が作られる。

B期　大規模な改作が行われる。SA 1500が存続し、北区と中区は依然区分されている。中区、北区とも、これまでの建物が廃絶し、中区では西側に礎石建物SB 1540がつくられ、その東にSB 1471，SB 1472、園池の東にSB 1476が配される。北区ではSB 1574がSB 1540と柱通りを揃えて作られ、東北にSB 1550が位置する。これらの建物配置は坪中心から7尺単位の数値で割り付けられている。SB 1574の柱抜取穴出土の軒丸瓦により、この時期は奈良時代後半にあたる。

このように各時期の建物配置をみると、未調査の南区は不明であるが、中区・北区では軌を一にした建て替えがなされ、両者の密接な関係がうかがえる。また、六坪の利用にあたっては、当初140尺を単位とする大きな区画割りを行い、細部の建物配置はA－1期では10尺、A－2期・B期では7尺を単位とした割り付けを行っていることが推定される。

今回検出した建物群は、園池の北側の区画にあたり、六坪の利用状況が一層明らかになった。園池を中心とする中区が、公的な宴遊の施設と考えられるのに対して、塀SA 1500以北の北区の性格は、六坪所有者の家政機関に係るものと思われ、園池の管理・運営が行なわれていたとみられる。また今回の調査により、西側の民有地へ遺構がひろがっていることが明らかになった。



第10図　第109次調査遺構図

④　**西一坊大路の調査**（第103－8、14次）

奈良県浄化センター施行の下水道管渠発進坑工事にともなう発掘調査を4ケ所の工区において行った。

1)　第27工区（第103－8次）

奈良市尼ケ辻町の県道木津郡山線の東に接する部分に南北6.5m、東西4.0mの発掘区を設定した。調査地は平城京右京四条一坊十三坪に西接する西一坊大路の存在が推定されるところである。現道路面より1.5mで黄色粘質土、その下に灰褐色粘質土、さらに黄褐色粘質土が堆積し、道路面から2.2mで地山の黄灰色粘土となる。地山面は南へ若干傾斜している。検出した遺構は溝1、土壙3、柱穴3であり、柱穴1の他は全て地山面で検出した。発掘区中央南半部で検出した土壙は東西幅1.0m、深さ0.3～0.4mで、発掘区の南に延びている。この土壙からは瓦、土器が出土した。土壙内下層からは奈良時代の多量の丸瓦、平瓦片と、8世紀のものと思われる四耳付薬壺が出土し、上層からは磨滅した11～12世紀の瓦器片が出土している。土壙の東側に南北方向の溝がある。柱穴は調査区内ではまとまらない。

2)　第28工区（第103－14次）

平城宮西南隅の南約80mの県道木津郡山線道路敷部分と、それに西接する水田上に南北6.0m、東西16.0mの発掘区を設定した。平城京右京三条二坊一坪に相当する場所である。水田面から1.0mで遺構面に達し、その上には河川の氾濫によると思われる5～6層の砂、粘土、砂質土が堆積しており、下位の層からは瓦器の細片が、上位の層からは近世の陶磁器片がわずかに出土している。この堆積土中には鉱滓の小塊が目立った。発掘区遺構面の東半部には深さ2.5m以上の自然流路と思われる大溝が北北西から南南東に流れている。溝中には粗砂および粘土が堆積しており、ごくわずかの磨滅した瓦器片、中世の羽釜片が出土した。この大溝は発掘区のさらに東に拡がっている。西半部には小土壙5を検出したが、まとまりはみられず性格は明らかでない。

3)　第29・30工区（第103－14次）

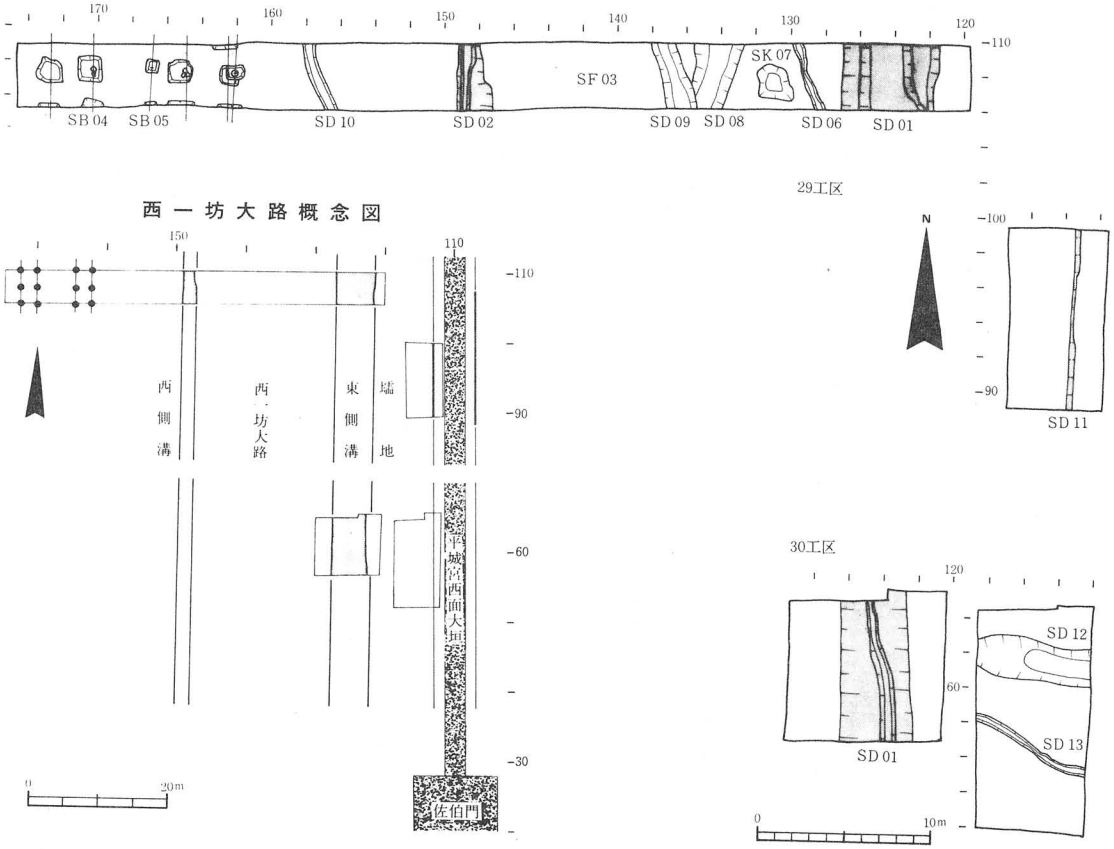
平城宮西面大垣に接する西側の部分に4ケ所の発掘区を設定した。宮西面中門

（佐伯門）の北方40～100ｍの県道木津郡山線の道路敷とその西側の水田部分で、西一坊大路および宮西面大垣の西側の壕地の存在が予測された。水田面から約0.6ｍで遺構面に達し、水田耕土、床土の下には１～２層の砂質土あるいは粘質土が0.1～0.3ｍの厚さで堆積しており、古墳時代前期～近世の土器片を若干含んでいた。遺構面は暗褐色粘質土で、場所によってはその上に黄灰色砂質土が堆積して遺構面となっている。この黄灰色砂質土の層中には古墳時代前期の土器が含まれる。

検出した主な遺構は溝７条、礎石建物１棟、掘立柱建物１棟、土壙１基などである。南北溝SD01は幅3.8～5.6ｍ、深さ0.5～0.8ｍで、粘土、砂が互層に堆積している。埋土上層からは８世紀後半の須恵器壺、杯が出土し、中層からは須恵器片の他、第Ⅱ期の軒丸瓦6308型式と第Ⅲ期の軒丸瓦6316型式が各1点,それに平瓦片が出土した。南北溝SD02は幅1.5～2.0ｍ、深さ0.2ｍで埋土は砂質土である。溝中からは８世紀後半の須恵器杯が出土した。斜行溝SD06、SD10および土壙SK07からは二重口縁をもつ壺、甕、高杯、器台、鉢など、古い様相を呈する布留式土器が出土しており、古墳時代前期の遺構である。南北溝SD08、SD09、東西溝SD12、SD13はともに平安時代以降のものである。礎石建物SD04は梁行18尺（天平尺）、東西に８尺の廂をもつ南北棟である。礎石はいずれも残っていない。SB04よりも新しい掘立柱建物SB05は梁行16尺の南北棟で、北でやや東に振れている。これら２棟の建物は西一坊大路の西に接する右京一条二坊四坪内に位置する。

SF03は20.2～20.8ｍの東西幅をもつ西一坊大路の路面部分に当たる。東側溝SD01と西側溝SD02との溝心心距離はほぼ24.0ｍであり、80尺（８丈）の大路幅員が想定される。また東西両側溝の中間点すなわち西一坊大路の中軸線と、平城宮第16次調査で確認されている朱雀門の中心（平城宮の中軸線）との東西距離＝532.37ｍであり、平城宮第32次および第39次調査ですでに明らかにされている東一坊大路中軸線と朱雀門心との東西距離532.78ｍ（0.296ｍ×1800尺）とほぼ一致している。宮大垣に接する部分での東一坊大路と今回確認した西一坊大路との状況を比較すると、東西両側溝間心心距離が80尺（８丈）であること、宮域に近い側の側溝の規模がより大きいこと、大路と宮大垣との間の壕地の幅が約10ｍであること、

以上の点については共通している。しかし、東一坊大路西測溝の幅８尺に対して西一坊大路東側溝の幅は約18尺と、２倍の広さであり、西一坊大路西側溝の幅も約６尺で、東一坊大路の東側溝幅４尺よりも広い。なお、南北溝SD 11 は幅0.1～0.4 m、深さ0.1 mの浅い細溝で遺物は含まれていないが、平城宮第59次調査で検出した宮西面大垣の東側の雨落溝SD 6303とは大垣推定中軸線を中心に対称的な位置にあり、この溝が西側の雨落溝であることも考えられる。しかし未だ確証するに至っておらず、今後の検討をまちたい。



第11図　第 103 － 14 次調査遺構図

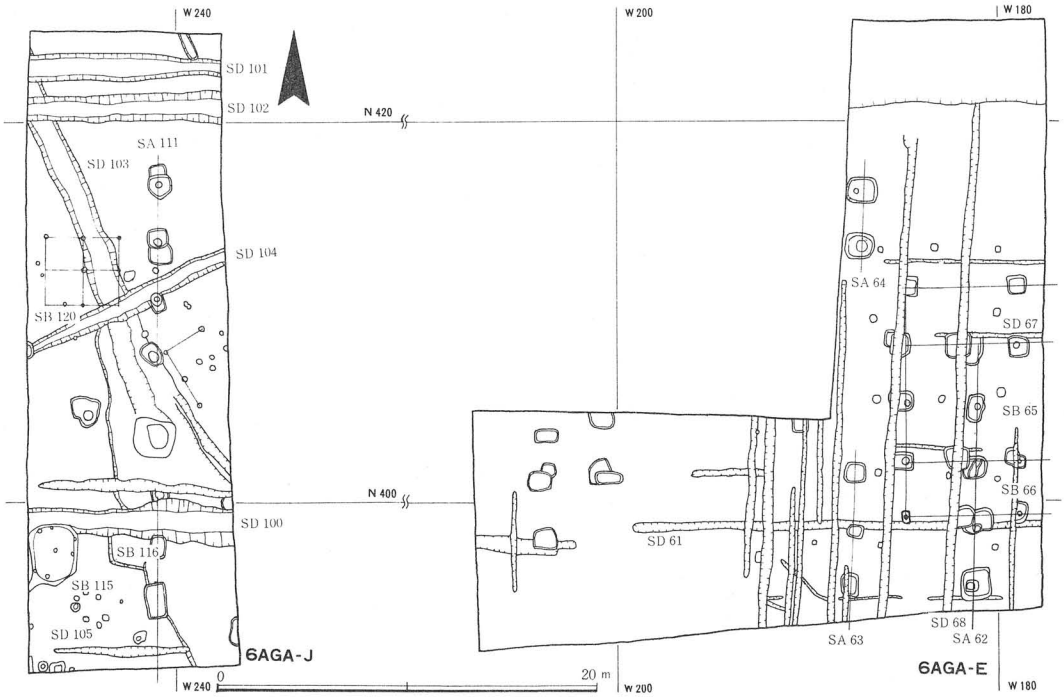
⑤　右京一条二坊の調査（第103−7次）

奈良市二条町一丁目地内で、昭和52年10月18日から同年11月10日まで、103−7次発掘調査を実施した。平城京右京一条二坊一坪・二坪に相当する地点で、坪境い小路の検出を調査の目的とした（第12図）。

東トレンチ（6AGA−E区）では、奈良時代の東西棟掘立柱建物SB65・SB66、南北方向の掘立柱塀SA62・SA63・SA64、溝SD61・SD67・SD68などを検出した。うちSA63は、SA62もしくはSA64と関連する一連の遺構である可能性が高い。掘形の重複関係から、SD61→SA62→SB65→SD67→SB66→SD68の順で変遷する。

西トレンチ（6AGA−J区）では、奈良時代の南北方向の掘立柱の塀SA111、東西方向の溝SD100・SD101・SD102・SD105などを検出した。その他に古墳時代の住居址SB115、溝SD103・SD104なども検出した。

奈良時代の遺構の重複状況は稀薄で、坪境い小路の幅員を2丈とすれば、SD100とSD105が小路の南北側溝である可能性がある。



第12図 第103−7次調査遺構図

⑥ **北辺坊の調査**（第 103 － 16 次）

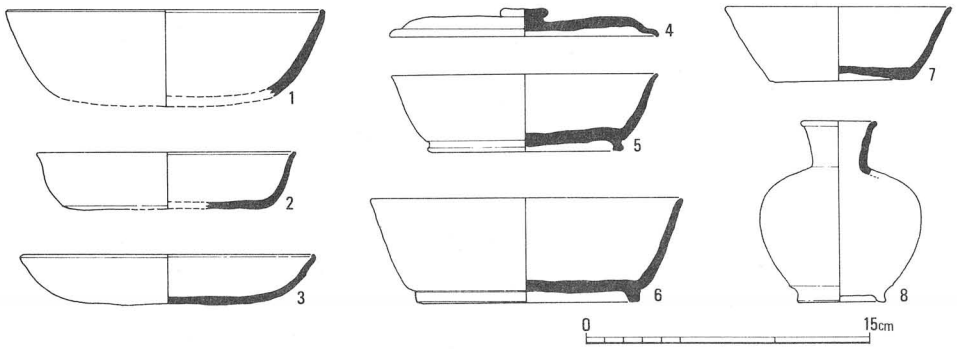
調査地は平城京北辺坊のほぼ東南隅にあたり、北京極大路の存在も予想された。

検出した主な遺構は建物 8 ・ 柵 7・井戸 2 ・溝 7 である。これらはほとんどが奈良時代のもので、大きく 3 時期に区分できる。

1 期の遺構　南廂の付く東西棟建物 SB 14（7 間× 3 間）の脇に、東廂の付く南北棟建物 SB 17（1 間以上× 3 間）と南北棟建物 SB 10A（2 間以上× 2 間）があり、SB 10Aの北には南北柵 SA 12A（1 間分検出）がある。これらの東方は南北柵 SA06 A（5 間）、南方は東西溝 SD 04（幅 0. 6 m）によって画される。SD04 以南には遺構がない。斜行溝 SD05 は奈良時代以前に朔る。

2 期の遺構　SD04 はこの時期まで存続。SD04 以南に遺構はない。SD 04 以北は、南北溝 SD 16（幅 2. 8 m）と SD 18（幅 0. 5 m）を側溝とする道路によって東西に 2 分される。東の区域には東西棟建物 SB 07（3 間以上 × 2 間）と南北棟建物 SB 10B（3 間以上× 2 間）があり、SB 10Bの西には南北柵 SA 13（2 間分検出）、北西には SB 14の廃絶後に設けられた方形の井戸 SE 15（内法 1. 3 m）がある。東方には南北柵 SA 06 B（5 間）がある。西の区域には方形の井戸 SE 19（内法 1. 8 m）がある。この時期には、SB10Bが総柱の建物 SB11（1間以上×2 間）に、SA 12 A が SA 12B（1 間分検出）にかわり、南には南北柵 SA 09（2 間分検出）が建つ。

3 期の遺構　南北棟建物 SB 08（4 間× 2 間）、東西棟建物 SB 21（3 間× 1 間以上）があり、SB 21の南には時期のやや朔る東西柵 SD 20（4 間分検出）がある。調査区

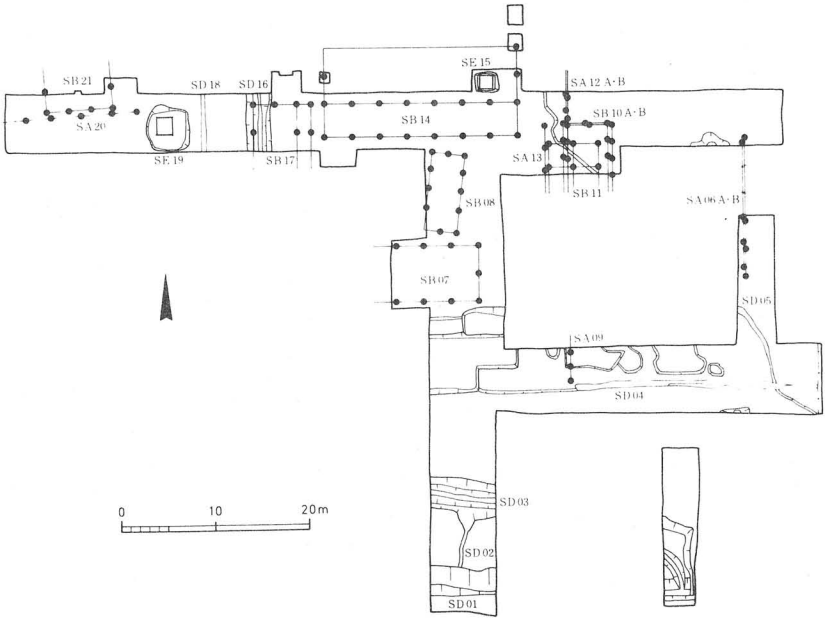


第13図　第 103 － 16次井戸 SE 19出土土器（1 ～ 3 土師器、 4 ～ 8 須恵器）

南辺に斜行溝SD03（幅3.0ｍ）があり、SD02がこれに注ぐ。SD04の北辺には2・3期に掘られた大きな土壙がある。東西溝SD01（幅3.9ｍ以上）は近世に降る。

遺物　SE15の掘形から奈良時代前期の土師器杯、SE15・19の埋土から多量の土師器・須恵器のほか木簡1（□条七尺□）、Ⅱ・Ⅲ期の軒瓦4、和同開弥2、斎串4、曲物4、凝灰岩礎石1が出土。SB07の柱抜取穴、SB08の柱掘形、SD16の埋土から奈良時代末の土師器皿など、SD03の埋土から平安時代前期の黒色土器杯が出土。遺物包含層から円面硯、灰釉杯、緑釉平瓦のほか多量の埴輪が出土。

まとめ　1期の遺構は、整然と配置されたものであり、奈良時代のはじめ頃にこの地域が平城京造営の一環として整備されたことを物語る。東西溝SD04は平城宮北面大垣心の延長線から約36ｍ（12尺）北に位置する。SD04以南には建物などの遺構がないので、ここを北京極大路々面と考えることが可能である。SD04の北は、北辺坊の二坊二・三坪にあたるものと考えられる。南北溝SD16とSD18は溝心々距離約6ｍ（2丈）で、坊間小路側溝と考えられ、それまで少なくとも2町分（二・三坪）を占めていた宅地を東西に分割したことを示すのであろうが、平城京の条坊復原による坊間小路の位置から約14ｍ西にずれる。この点今後の検討を要す。



第14図　第103－16次調査遺構図

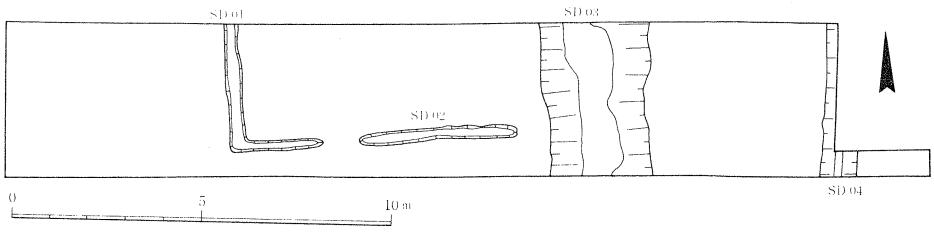
⑦ 右京三条一坊二坪の調査（第 103 － 15 次）

この調査は奈良市北新町における建物新築にともなう現状変更の事前調査である。当該地は平城京左京三条一坊二坪の東南の一角を占めており、水田畦畔の遺存状況から二と七の坪の坪境小路及びその西側溝の存在が予測された。

調査地の土層はトレンチ東端より 4.5 m のところを南北に通る畦畔を境にして少し異なっていた。上から黒灰色土（耕土）、暗灰褐土（床土）、黄褐粘質土で、その下は、東の方では灰褐砂質土、黄灰白土、西の方では灰色粘質土、黄灰白土である。遺構は灰色粘質土上面で多くの柱穴とその下層で 4 条の溝を検出した。

柱穴は、柱根の残っているもの 5 つを含めて、いずれも小規模で、大きいものでも径50cm足らずである。トレンチ中央付近では 1.65 m間隔 で東西に 3 間、トレンチ西半部では 1.8 m間隔で東西に 3 間、また、トレンチ西端では 1.5 m間隔で南北に 1 間、それぞれ柱穴がならぶ。柵あるいは建物の一部になると思われるが、トレンチ調査のため遺構としての性格は明らかでない。

下層の溝は、L 字形に曲がる溝 SD01 と東西溝 SD02 及び南北溝 SD03 ・ 04である。SD01 はトレンチ北端から南 3 m のところで東に曲がり 2 m ほど続いて終る。SD02 は SD01 の東延長上にあり、長さは 4 m ほどである。トレンチ東端でその西肩を検出した SD04 は、トレンチ南壁沿いを一部拡張した結果、幅約 1 m、深さ約20cmである。SD03 は幅 2.8 m前後、深さ約50 cmで、坪境小路西側溝と推定される。SD 04 との間隔は約 6 m （ 2 丈）であるが、発掘区東側の水路は改修時の調査で、小路東側溝が検出され、SD 04 との間は約12m （ 4 丈）となる。



第15図　第 103 － 15次 調査下層遺構図